

池上彰「新聞ななめ読み」(続)

昨日のレポートの続きである。9月6日朝日新聞朝刊の社会面に「池上彰さんの連載掲載見合わせ 読者の皆様におわびし、説明します」という東京本社報道局長の釈明が掲載された。「池上コラム」が掲載された4日以降も、読者などから多くの疑問や批判が寄せられたようだ。

6日の声欄にも「信頼は絶えざる自己検証から」「掲載見合わせは重大な問題」「池上さん、連載を続けて下さい」という投書が3本掲載されている。同感する指摘が多い。私も腹にすえかねて、じつは4日朝早く声宛てに投稿した。これらの声とほぼ同じ趣旨なので、たぶん掲載されないと思うが、私が言いたいことは「朝日新聞しっかりしろ」である。今の「厳しい日本」の状況のもとで、朝日新聞に「期待」するだけに、せめて投書して気持ちを伝えたかった。

とりあえず、報道局長の「今回の過ちを大きな反省として、原点に立ち返り、本紙で多様な言論を大切にしていきます」との言葉を信じたい。それにしても、このところの「朝日バッシング」は目に余るものがある。写真は新聞掲載の「週刊文春」「週刊新潮」

の広告である。とにかく「朝日批判」オンパレードだ。読売は週刊誌ごと下1面の大きな広告であり、雑誌「Will」の「国賊朝日新聞は廃刊すべきだ」という広告も載せている。



朝日をはじめとした特定の新聞に対する「バッシング」はこれまでも

あったが、私の記憶ではこれほど雑誌と新聞が一体となったものは記憶にない。これを支える「勢力」が見え隠れしているのも気がかりだ。今後の成り行きでは、深刻な「事態」を招きかねない。私なりに「新聞ななめ読み」すると、新聞全体の危機だと考える。

ただし、毎日新聞のような指摘にも注目しておきたい。8月7日の社説「慰安婦報道 国際社会に通じる論で」において、次のように述べている。「慰安婦問題とはそもそも、戦時下において女性の尊厳が踏みにじられたという、普遍的な人権問題だ。国際社会に通じる感覚と視点で議論していくことが求められる。にもかかわらず、朝日新聞が吉田証言を前提にした報道を続けたことで、国内議論は慰安婦の強制連行ばかりに焦点が当てられた。その結果、女性の人権という問題の本質がゆがめられたのは残念だ。もっと早く訂正すべきだった。」

この指摘は池上「コラム」にも共通するものだ。朝日新聞はこうした指摘にどう答えるのか。一部週刊誌や読売・産経新聞などが「国際社会に通じる論で」議論しているとも到底思えない。新聞をはじめとしたジャーナリズムの真価が問われている。

(2014年9月8日)